



1988年(昭和63年)
12月号(No. 522)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 日中合同登山隊のチェルル山
登頂とその意義 平井一正……(1)
海外の山……(2)
「エベレストのてっぺんは大にぎわい」「SACの悩み」「海外あれこれ」
ウッドシャフト・ピッケル
二村のここと(上) 安藤忠夫……(2)
報告 東北ブロック
「秋田のつどい」……(5)
自然保護随想……(5)
安曇野とウェストン師 角田啓蔵……(6)
図書紹介……(7)
「K2 TRIUMPH AND TRAGEDY」他4
剣沢から十字峡附近への
初下降の記録 江上 康……(9)
東西南北……(11)
「還暦を迎えた雲取山荘」他5
高橋定昌さんを悼む 澤村幸蔵……(13)
会務報告・ルーム日誌など……(13)
図書受入報告 図書委員会……(14)
お知らせ 「日だまり山行」……(15)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

●年末年始の休み
12/29(木)～1/5(木)

招いて、剣岳とその周辺で約二週間の合宿をし、登山技術の基礎訓練を行なう予定である。このような活動を通じて、中国における登山指導者の育成にも協力することができれば、

お知らせテラップ電話
234 六六五九

日中合同登山隊のチェルル山 登頂とその意義

平井一正

四川省からチベットに入るには、川藏公路の南路と北路の二つがある。いずれも四川省の茶をチベットに運ぶ貿易路として使われていた。南路は巴塘で、北路は徳格で金沙江を渡る。チェルル山(六一六八)は、その徳格の近くにそびえる今まで知られていなかった未知の山域、沙魯山系の美しい処女峰である。神秘的な湖、新路海に面して峨々たる岩壁で囲まれたこの山に、一九八八年九月、神戸大学・中国地質大学(武漢)の合同登山隊が登頂に成功し、日中夫々七名の隊員が頂上に立った。

中国地質大学(武漢)は、一九八七

年大学に昇格するまではその名を武漢地質学院といい、王富州、尚子平、劉致新など多くの登山家を生んだ。神戸大学が一九八六年クイラカンリ(七五四)の初登頂に成功したとき、武漢地質学院の大学院生ら五人が高所協力員として協力したことを契機として、両大学の山岳部(中国地質大学では登山協会という。組織もはるかに大きい)の間で友好協定締結の話がもちあがり、交渉の結果、一九八七年十一月調印の運びになった。この協定は、学生を主体とした日中合同登山隊を、日本、中国に交互に派遣しようというもので、費用はそれぞれの国が負担す

ることを原則としている。そしてその第一回合同登山の目標をチェルル山としたのである。

このような、大学山岳部間の日中友好協定は、おそらくわが国ではじめての日中友好に少なからず貢献することであろう。事実、今回の合同登山隊は、総隊長胡燕生のもと、日本七名(北口博教隊長)、中国十名(朱発榮隊長)、合計十八名の隊であったが、言葉の壁、登山技術のアンバランスなどさまざまな困難をのりこえて、完全なチームワークをとることができたことは、BC(三八〇)から頂上までわずか十二日間、未知のルートをさぐりながら(C2ではじめて頂上が見える)、悪天候のスキをついての登頂成功と同様に、高く評価されている。一九八九年の夏には、中国側隊員を

大学山岳部の新しい発展の方向ともなり、また堅実な日中登山交流の行き方にもつながると思われる。一大学山岳部の課題としては荷が重い、長く続けたいと希望している。



ウッドシャフト・

ピッケル二村のこと(上)

安藤 忠夫

ピッケルはウッドシャフトでないのだめだ、などといえど今では笑止ものである。昨今の登山用品店の棚上にあるピッケルは、その機能面からメタルシャフトが一般的で、名あるウッドシャフトのピッケルはすっかり姿を消してしまった。先頃の札幌門田の廃業によってこの傾向は益々強く、今では国産の鍛造によるウッドシャフト・ピッケルは二村だけである。登山が「所詮は遊びの延長だ」とするならば、確かに機能的には劣るであろうウッドシャフト・ピッケルに対しても、今なお愛着を持つ者がいてもよいではないか、とは常々に思うところである。

わが国のウッドシャフト・ピッケルといえば、仙台の山内東一郎(昭和四十一年四月四日没)、秋田の森谷一郎(昭和五十五年十一月九日没)、札幌の門田(三代目門田正氏、昭和六十一年三月廃業)などが知られ、それぞれに一世を風靡し、味わい深いピッケルを鍛えたが、今ではどれも入手できない。先頃(昭和六十二年暮れ)、ただ一つ残っている国産ウッドシャフト・ピッケル二村の製作者・二村善則さん

海外の山

エベレストのてっぺんは大にぎわい

三月号のこの欄で「頂上の静寂」としてとりあげ、また、世界最高峰の話になるが、昨一九八七年には、十六隊が挑んで一人も頂上に立てなかった(十二月末の韓国隊を除く)エベレスト(八八四八m)が、八八年秋に大変な登頂ラッシュを迎えた。

いずれも、ネパール側から。内容が、多彩である。

まず、九月二十六日、マルク・バタール(三七)を隊長とするフランス隊(十九人)の六人とシェルパ三人が南東稜から登頂した。このうち、バタールは、BCから二時間三六分までてっぺんに到達、冬のダウラギリ1峰(八二六七m)、春のマカルー(八四六三m)に次いで、こ

とし三つ目の八千峰一日登頂をやつてのけた。

同じ日、ソウル五輪を記念してアタック中の韓国隊(チョイ・チャンミン隊長以下十九人)の三人が、難ルートの柱状南岩稜(サウス・ピラー)から登頂、その後二十九日に三人、五輪最終日の十月二日には登攀隊長が単独で同ルートから登頂すると共に、ロツツエ(八五一六m)にも四隊員が同時登頂した。エベレスト、ロツツエのダブル登頂は一九五六年のスイス隊以来三十二年ぶりである。

一九六三年の米国籍による西稜ルート登頂二五周年を記念して結成された十三人から成る米国籍は、九月二十九日、念願の米国籍女性初登頂者を誕生させた。ステーション

1・マリ・アリソン隊員(三〇)がシェルパ一人と共に登頂、次いで十月二日にはもう一人の女性、ペギー・ジーン・ルース(三〇)を含む二隊員と三人のシェルパが頂上に立った。一九七五年五月に日本の田部井淳子、中国のバンドウ(潘多)が南北から相次いで登って以来、世界最高峰に立った女性性は、これで八人。そんなになつたか、とも思えるし、延べ二百五十人を越える登頂者数を考えると意外に少ない、とも言える。

別のフランス隊が十月十三日、南東稜からアタック、隊員一人、シェルパ二人が頂上に立ったが、下山中シェルパ二人は死亡したことが、二次隊によって確認された。やはり南東稜から挑んだスペイン隊(ルイス・ベルビス隊長以下二十二名)からは、十月十四日、三人の隊員と二人のシェルパが登頂した。シェルパの一人は、四十歳のアン・リタで、これでスンダレ(五月の三国合同登山の直後に五度目の登頂に成功)と並ぶ、「エベレスト五回登頂者」の榮譽を確保した。ただし、この隊では高所ポーター一人が雪崩で死亡している。

八人のチェコ人、五人のニュージーランド人、それに米国人一人から成る国際隊のヨーゼフ・ユスト隊員(三三、チェコ人)は九月二十八日、仲間一人と共に西壁からロツツエに登頂、次には単独でエベレスト南西壁に挑み、十月十七日、登頂。しかし、下山中、行方を絶った。

こうして、九月末から十月中旬までに三十二人もの各国男女がエベレストの頂上に立った。

一九五三年五月二十九日に二人の男が人類で初めてそこに達した後、三十二人目を迎えたのは、一九七三年のイタリア隊で実に二十年を要した。それが、たった三週間である。

(江本嘉伸)

をお訪ねする機会があったので、その際に伺ったことをここに記しておきたい。

二村ピッケルの鍛冶場は自動車の町愛知県豊田市にあって、愛知環状鉄道梅坪駅からほど近い高台の一角にある。位置的には名古屋市の東、濃尾平野と西三河の丘陵地が接する辺りで、標高こそ低いがこの地方では顕著な峰の猿投山(六・一九)一、二等三角点補点の南麓にあたる。その猿投山には猿投神社(祭神は景行天皇の第一皇子大碓命)が祠られ、銘行安の太刀・黒漆太刀、榎鳥糸威鎧(かしどりとおいとしよろい)などの重要文化財があつて、この一帯は昔から製鉄の祖・タタラの盛んな地域である。二村ピッケルに草書で刻まれている「三州猿投山麓住善則」の銘はこれを用いのである。

ピッケル製作の動機および現況について、二村さんは次のように語られた。

初めてピッケルというものに接したのは昭和二十八年だった。登山家の知人に依頼されて三本を試作したが、モデルはシェンクか門田だったと思う。

その後、雑誌『山と溪谷』の昭和三十三年一月号に載った山内のピッケルにまつわる随筆「山内ピッケル哀話」(畠中善哉著)に接し、登山の道具と

海外の山

SACの悩み

海外在住のスイス人宛に、国内のトピックスを選んで知らせる定期のブレタンで、家内宛に届いた最近号をみると、「スイス山岳会(SAC)、百二十五年、変る時代」の記事が目についた。不特定多数の海外同国人宛に、SACを主要トピックとして採り上げるなど、如何にもスイスらしいが、SACのもつ社会的重みを知るよう興味がある。それもその筈、スイス・アルプスと、またそこで行なわれる登山を、過去百年以上、「管理」してきた団体だから、その重みは当然ともいえる。その事実ばかりでなく、日刊新聞の長文からの要約である小冊子の短文は、SACの今の悩みを伝えて面白いので、更に縮めてここで紹介したい。

元の記事がSACの歴史から初めているらしいので、「要約」もそれに従っている。

登山史乃至小集団の事の初めの書き方は、どこでもお国柄を映しているが、ここでも例外ではない。SAC誕生の背景を愛国心の発露に求めている。アルプスの雄峰が次々に登られた黄金時代の主役は外国人で、特に英国人だった。アルプスの氷雪の世界を詳しく知るためには、英国の文献に頼らねばならなかった。この事情を潔しとしなかった三十五人の旦那衆が、中部スイスの小邑オルテンの駅食堂に集り、SACを組成したのが、一八六三年十月。その目的は、アルプスを探険し、その自然美を保存し、故国の山々への愛情を鼓舞しそれを大切にすること、だった。初めは登山が出来るような、また登山を一種の愛国的行為と自負したような、エリート意識の強いブルジョワの旦那衆の集りだった。それが十九世紀の終りから二十世紀の初めにかけて、登山熱とスキー熱

が澎湃と興った結果、初めの稍高尚な団体から、大衆団体に成長し、今日の七万七千人会員の組織になった。

(婦人は一九八〇年から受け入れられた)。山小屋は初めから手掛けられ、今日百五十三戸のネットワークを持ち、数では飽和状態だが、今でも避難小屋は拡大されつつある。

SACの抱えてきた難問は、自然保護である。アルプスの自然美をそのまま残すという創始者の願いは、観光業と電力業と交通業の発展に勝てなかった。会の中にそういう業界の代表がいて強力なロビーをもち、「緑」派の動きを攻撃してきた。一九六九年、会は初心に帰り、自然保護委員会を設け、「アルプスを護るための基準とガイドライン」を作ったが、SACはこの方面で成功したとはいえない。更に自然保護の専門家を方々に配したが、登山鉄道と観光業に従事する会員からの強い反対で、立ち止りの状況。会の専門家、地質学者のトニ・ラバートは言う。「私達だって、なにも古風のSACである訳ではない。しかしこれ以上アルプスの景観を壊すというなら、怒れるSACになることも辞さない」。

さて、もう一つの難題は、アルプスに出現したおびただしい数の競技ゲームである。競走的な登攀、ソロとマラソン登山の競い合い、スピード・クライム、パラ・グライド、雪上サーフィン等。現代の、もしくは時代の精神を映したこういう活動は、古典的な登山概念の真向からの反対側に位置するものなので、SACの中の伝統主義者は当然ながら、真正の登山道義に弔鐘が鳴っているように感じている。頂上の十字架に達するより、途中の岩塔でジムナスティックな喜びを味わうという若いクライマーは、今のところSACの古参から無視された形になっているが、隣国で賞金まで懸けた早登り競走が催されるに及び、会の保守的クライマーは今やアルプスのデ

海外の山

してのピッケルに興味を持つようになった。そんな折り、黒田圭助さんの記事「ピッケルのカルテ―古今の名刀銘々伝」(昭和三十四年十月号)を読み、早速、黒田さんへ電話をしたのがきっかけで、以来二年間の試作期間をおいて昭和三十八年から販売にかかった。したがって、設計・黒田圭助、製作・二村善則ということになる。

初期のころはいくらかビエルンシュタットに似ていた。が、人のまねをしない、独創による、実践用のピッケルをということで、シャルレの振り易さとビエルンシュタットの穿徹性を目指した。日本海軍の九一式徹甲弾を模してピッケルの先端を平面とし、さらに山内フィンガー部などをモデルとして現在の形が完成した。武人の魂といわれた日本刀、とりわけ戦国時代の実用第一の名刀といわれた胴田貫を目指したものである。

ピッケル本体の材質は、JIS(日本工業規格)で SNCM9 種鋼(ニッケル・クローム・モリブデン鋼)といわれる鋼材を使っているが、熱処理には非常に神経を要するものの、低温正がよいために敢えてこれを用いている。現在は、大同特殊鋼㈱から特別に真空熔解炉で熔かした鋼を、最初から指定の太さにしてもらって入れている。この真空材を使ったものに「三州

海外の山
イズニールランド化を心から怖れているように見える。とって S A C が本気になって、スイスの岩壁から競走的なクライマーを追いつくというのなら、会はずの若手会員を失う破目になるのではないか、S A C の情報部長ペーター・ドナッチは、会の悩みをそう語った。以上。
(一九八八年七月 J・T)

海外あれこれ

海外委員・中 村 テ ル

山岳環境保全のため、マウンテン・ウイルダーネスと称する新しい協会がラインホルト・メスナーの意志を基にミラノに結成された。この告示は一九八八年六月十五日のイタリアの新聞に発表され、エドモンド・ヒラリー卿が名誉会長となった。その協会の外国代表者はアメリカ山岳会々員であるクリス・ボニントン及びリト・テヤダフロレスである。八八年の計画のうちにはドロミテのマルモラーダの南面の清掃と欧州の国会議員数名とのモンブラン登山があり、これはモンブラン国際公園開始運動を促進するためのものである。

*
八八年六月二十二日にチャールス・リンドバーグ賞が、ワシントン州ボルスボーにてエドモンド・ヒラリー卿に贈られた。
これは一九二七年に大西洋を単独で横断飛行し世界の

警異的となったリトル・フォールスを記念した賞であり、「個人の生涯をかけて、技術の進歩と環境保全との調和を例証している」と認められた人に贈られるものである。彼は現在はいンド、バングラデッシュ及びネパール国担当のニュージーランド大使で、ネパールのシェルパのため、学校、診療所及び飛行機発着所などを建設したヒマラヤ・トラストの創立者である。

なお登山者としては八千四百峰十四座の全山頂に到達した最初の二名として、ラインホルト・メスナー及びイエジ・ククチカに銀メダルが授与された。

これに先だつアルパイン受賞者としては、チャールス・G・ブルースが一九二二年のエベレスト遠征に対して一九二四年に金メダルを受賞し、ギンデル・O及びヘッティ・ディーレンフルトはカラコラム峰の踏査に対し一九三六年に金メダルを、また一九三二年には、世界第三の高峰、カンチエンジュンガに一九二九年に遠征したドイツ隊のリーダーだったバウル・パウアーの著書「*Kampf um den Himalaya*」に対し金メダルが贈られている。

*
一九六三年のエベレスト遠征隊の、エベレスト登頂にアメリカ人として最初に成功した隊員二十名のうち生存者十五名、その中の十四名が登頂25周年を記念して再会し、六月十日にシアトルのシェルトン・ホテルで祝賀会をひらき、ウィリー・アンソールド記念基金を集めた。

海外の山

猿投山麓住善則」を、別に大気材使用のものには「三河国住二村作」の銘を刻むことにしている。(以下次号)

〔訂正〕

本誌五二〇号「63年度自然保護委・

全国集会」の記事中、一頁四段一〇行目より十三行目「これは建設省による「国営アルプス安曇野公園」構想の中の一環で、既に三千万円の調査費もついている」は「これは建設省による

「国営アルプス安曇野公園」構想の隣接地で民間または第三セクター方式によるものである」の誤りにつき訂正させていただきます。

また、七頁の自然保護随想の最末尾

に〔参考資料・ナショナルリスト〕とありますが、これは〔参考資料・ナチュラリスト〕の誤りですので、併せて訂正させて頂きます。

報告

自然保護委員 小倉 厚

東北ブロック

「秋田のつどい」

昭和六十三年十月十五、十六日、秋田県の栗駒国定公園で、秋田支部主催の東北ブロック集會が開かれた。第一日目の十五日は大雨で、秋田支部山行につきものの雨降りはまちがいなしと思われた。このような悪天候にもかかわらず遠く岩手からは松田和弘會員、東京からは石橋正美支部担当総務委員ほか五名、福島からは中嶋正夫支部長ほか七名、宮城からは庄司駒男支部長ほか七名、山形からは村上支部長ほか七名が遥るマイカーを走らせるなどして参加、秋田支部會員を合せ六十名ちかい會員が「秋田いこいの村」に集った。「秋田いこいの村」は鉄筋コンクリート四階建のりっぱな宿泊施設で、集った會員たちは各自、会費と引換えに紙コップ詰の秋田の銘酒二個、JACマーク入りの秋田県特産、漆塗のおしぼり受一つを記念品として受取る。

〔自然保護随想〕

白い尾瀬

「綺麗ですね」とつぶやいた私に、平野長英さんは、「もうじき白い尾瀬になります」と答えられた。このときは長英さんと植物学者本田博士に誘われて、沼山峠を越えて尾瀬沼に入ったのだ。

沼山峠から見た錦繡の尾瀬に思わず呟いた私の一人ごとであったが、長英さんはやがて訪れてくる厳しい冬が、もうそこまで来ているのに思いを馳せられたのである。

峠から三人で下りながら、ふと見つけたまっ白なシラタマの実に「いつときこれを集めて砂糖代わりにしたものです」と長英さんは懐かしげに二つ三つ手のひらに転がしておられた。きつと戦後の何もない時代だったのだらう。本田博士が「そんなサロメチールのようなおいのするものがねえ」と、いぶかしげに語られると「調理の仕方ですよ、でも今は食べませんね」と笑った。しかしいまやお二人ともいない。天国のどこかで揃いで野の花の道を歩きながら、のんびりと語りあっておられるであらう。

開会十六時で、司会佐藤兼治・秋田支部常務委員がおこない、まず岡田支部長が挨拶に立ち、今回の集りでここを選んだのは、老若男女向きだからとその理由を説明する。

引続き行なわれた講話は「川原毛の歴史」で、講師は八十三歳になる、こ

そんな事を思いだしながら、霏々と降る雪の原を、山の鼻めざして前を行く友の、靴の踵を見つめて私は歩いているのだ。

きのうここを通った時は、原はうつすらと掛かる霧に閉ざされていたが、雪は舞う程度で、原に何処までも敷かれた木道が、ずっと向こうまでよく見えていた。池塘のオゼコウホネはまだ緑の丸い葉を浮かべていたし、原に侵入してきたササもその存在を誇っていたが、一夜あけたきようは、四〇センチも積もった雪にすべてが掻き消えてしまった。きのう水面のあった池塘にはシャーベット状の雪が被ってしまい、コウホネはその下に眠ってしまっし、傲慢なササも白いボンチョを着せられて沈黙してしまっし。

白一色に包まれた尾瀬が原は夢幻の世界のようであった。白一面の原を切るものは、四〇センチほどの白い池塘の壁だけであった。

時々小さいつむじ風が舞っている。その都度雪が舞い上がる。その舞い上がったあとにナナカマドのつぶらな赤い実が覗いていた。私は虜（とりこ）になってもいいから、ずっとこの原に居たいと思った。

(十月三十日 渡辺正臣)

の地域の名士でもある郷土史研究家の富谷杉之助氏だった。同氏の所有する山をとらねば、川原毛から湯沢の街

には出られないといわれるほどの大地主でもあるのだが、学究肌の質素な身成りで話をする氏の語り口には、三途

次代に残そう美しい山と溪

川、血の池地獄、浄土長嶺、極楽法羅陀地蔵、施餓飢台など、怪異な臭いを発する地名の散在する場所にふさわしい調子があり、ときおり耳にする激しい雨音とともに、川原毛の地名の由来や、九十九歳まで生きたという小野小町の伝説についての氏の講話は、参会者全員が聞き耳を立てたほどだった。

「私は自分の出身地を言うとき、かわらげの出でして、と言うと相手はみんな変な顔をするのですな。ご承知のとおり、火山地帯のこの辺りには大きな木が生えていない。生えるべきものが生えていない。それで川原毛という地名がついたようですね。」「小野村には小野よしざねという軍司が京都から来ておって、村長の娘の太町というのを妻にしていた。京都にも妻がいたというのですから、さしずめ今でいう現地妻というところですか。そのあいだに生れたのが小町だということです。」「話の面白さも手伝って、そのあとの支部長連絡会議は開催時刻が少し遅れたほど。」

懇親会は席を移して、十八時から大宴会場で支部担当の石橋総務委員の挨拶で始まる。芋煮など秋田の御馳走をさかんに大酒盃で濁り酒を回し飲み。野趣に富んだこの会も翌日の晴天をはかない望みながら期待しつつ締め、三三五五、寝につく。

安曇野とウェストン師

角田 啓蔵

ここ数年、北アルプス常念岳の登山口である「須砂渡」を舞台に、「ウェストン師」が明治二十七年に常念岳に登ったことを由来とした次のような一連の行事が、地元で常念研究会という団体を中心に、「村おこしイベント」として賑やかに行なわれている。

ウェストン胸像の建設

あづみ野ウェストン祭り

ウェストン記念館の開館

私は、「村おこし」についてとやかく言及するつもりは全くないが、その「村おこし」にかつがれてしまったウェストン師のことを考えると、これらの行事が師の意志に反したものではないかと思えてならず、これらの出来事について参考までに報告したい。

私は、それまで、これらの企画の中心となった常念研究会について、常念岳を中心にして山岳の研究をする立派な会であるという認識を持っていた。

ところが、昭和五十九年の同会の会報にウェストン像建設計画画成として「外国人として常念岳に初登頂したのは日本アルプスの命名者として知られる、イギリス人であるウォルター・ウェストンです」と師に対する誤った認識に立った記事を書き、像建設に伴う資金募金を始めたのである。

更に、ウェストン師が「松本周辺のすべての山の中心で、常念岳の見事な三角形ほど感動させるものはない」と讃えたその常念岳から、ヘリコプターで石を下ろし、その石の上に師の像を建設しようと企画したのである。

ある場所での企画をした常念研究会の代表者に出会うことがあったので、この誤りを正してみた。

しかし、同会の代表者は、ウェストン師が日本アルプスの命名者ではなかったと訂正記事のせる必要もないし、石も常念岳からヘリコプターで下ろすという答えだった。

その後、この件について、同会の会報で誤りが訂正され、またヘリコプターで台座の石も下ろされなかった。この件は落着いたと思われた。昭和六十一年、ウェストン師の像は、師が讃えた常念岳の登山口にある須砂渡の一角に建設された。

昨年（昭和六十二年）の夏、「あづみ野ウェストン祭」がこの像の建つ須砂渡で行なわれ、前夜祭では、ミスササドコンテスト、ロック・ジャズコンサート、盆踊り等が企画された。

そして今年の七月、その須砂渡に「ウェストン記念館」が建てられ、この研究会の代表者が館長となり開館した。

一方、今年の夏の「あづみ野ウェストン祭」では常念岳を背にしたウェストン師の像が大きく写ったポスターが印刷され、ふたたび「ミス・ササドコンテスト」等が企画された。

ポスターに写っていたウェストン師の姿は、上高地で見る顔とは違ってどこか寂しそうな顔に見えた。しかし、ウェストン師の像は建設され、師の記念館も開館した。そして、お祭りも毎年開催されることと思う。

松方三郎氏は「信濃支部報」第五号に「ウェストン翁の一面」と題して師の人物を「いっこく」であったと紹介する文の中で「今日の日本は、日本の山はどうか——、こう書いてくると、勢いそこまで問題を進めて来なければ

明くる十六日、前夜半まで激しく降りつづいた雨がうそのような快晴。ときおり耳にする間欠泉の噴出音、それとともに立ち昇る噴煙が、濡れた木の葉と好対照をなす。前の日の雨が山頂付近では十五、六センチの積雪となつたとの情報で、最初の計画を変更し、山伏岳から高松岳、小安岳への縦走となる。探勝組は川原毛の見学を前夜の講師、富谷氏とともにこなす。

山伏岳、高松岳、小安岳の山頂からは冠雪の鳥海山、虎毛山、栗駒、秋田駒と、周囲の山々の展望がきき、地元会員も感激するほど。カメラのシャッターの音が激しい。山岳会のものにとっては、快晴の山こそ最高の御馳走というべきだろう。

冷たい風を山陰に避けて昼食をとったあと、青空を背景にして並ぶ山々の連なりを眺めながら、紅葉した楓の葉を一枚浮かせたコップ酒を一口ずつ回し飲みする。

この山行途中の山道に、われわれJACの者が来るからと、富谷氏がわざわざ自前で人夫を雇い、前夜の講話に出てきた杉の木が生えている場所を示す立札を立ててくれた所があり、岡田支部長は、日本山岳会に与えられた評価がこの地方で如何に高いものであるかを筆者に話してくれた。

下山後、川原毛探勝組の一部と、泥

ばならない。答えは書かないでも解っている。しかし、やしくもそのウェストン翁の肖像を高地にかかげている以上、吾々としては、このままでいいのだというわけにはいかない」と書き残されている。

湯で合流し、何人かは温泉に浸って汗を流し、夫々は別々に家路につく。この日は夕闇が迫るころになつてもまだ一片の雲も出ない良く晴れた日だった。

(岡沢祐吉)

(十月十六日)

川原毛地獄探勝班十七名は、八時マイクロバスにて出発、木地山、泥湯を経て川原毛地獄に到着、昨日の雨がウソのように晴れ上り、周囲の山々の紅葉も一段と美しくなつて楽しませてくれた。

ここ川原毛地獄は硫黄鉱山の採掘場として栄えたところで、部落、分教場があったが、今は後かたもなく、荒涼とした山だけが霊地として残り、地蔵山、山の神の社、針山、賽の河原がある。

案内に昨日講話していただいた、富谷先生をお願いして探勝、終りにこのイベントである、秘湯「大湯滝」(地蔵園地駐車場から十五分)に降ったが、いつもは水着姿のギャルで賑わう湯滝も連日の雨で温度が低く入浴も出来ずサッサと帰る人が多かった。私

以上、安曇野の出来事を報告し、改めて、ウェストン師がわれわれに何を求めていたのかを会員諸氏に思い起して欲しいと願うものです。

(長野県南安曇郡梓川村在住)
安曇野とウェストン師

達も湯滝の大きさを確認し引き返し、十一時三十分、迎えのマイクロバスに乗って帰宿した。

(福田文二)



図書
紹介

K2 TRIUMPH AND TRAGEDY

by JIM CURRAN

一九八六年、英国隊のカメラマンとしてK2入りした著者は、英国隊がK2登頂失敗後もポータランド隊と合同隊のBCマネージャーとして残り、同年夏を最初から最後までK2で過ごした。

同年パキスタン政府は九隊に登山許可を下し、内二十七人が登頂に成功し、就中ポータランド隊の南フェース及び南南西稜の初登、フランス隊のポータランド女性による女性の初登頂、そし

てイタリア隊のフランス人によるBCから二十三時間での登頂といった輝かしい成果を残している。一方、登頂者のうち七人を含む十三人が遭難するといった悲劇の夏シーズンでもあった。

第一部

十一人の英国隊は北西稜に挑むが遂に力尽きて下山する。その間、英国隊BCにいた著者はアメリカ・イタリア・ポータランド、韓国、オーストリア・フランス・バスク隊や、ヘルリヒコツファア隊の来訪を受け、また彼等を訪問し、情報交換しながら各国登山隊のそれぞれ異なる雰囲気を感じ取っている。トランシーバーでの登頂成功ニュースと共にアメリカ・フランス・ポータランド・イタリア隊の遭難の報に昼夜を問わず救援活動する様子が描写されている。

第二部

英本隊帰国後、七月後半から著者はパキスタンラジオの天気予報の入手及び交信係として英・ポータランド合同隊のBCマネージャーをつとめる。八月三、四日には登頂成功が相次ぐが突然の天候悪化でひどいストームとなり大

悲劇となる。韓国隊は悪天候の中、下山に成功するも、他隊は何らかの致命傷をうける。吹雪の中たどりついたのにテントが飛ばされてなくなっていたり、仲間を助けながら下山を続け生還寸前で吹雪の中に消えたり、燃料もないC4の寝袋の中で水をつくっている。帰途につけなかったり、ポーランド・オーストリア、ポーランド・英隊が次々にストームの中遭難していく様子がリアリスチックに記されている。

第三部

各隊帰国後のマスコミ報道と不適切な表現への当惑と共に、十三人の遭難と死因、属していた遠征隊の性格、彼等の有する共通点等を分析している。

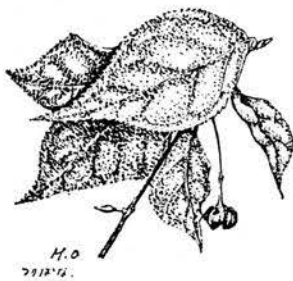
八千メートルの巨峰への無酸素登山は一般的になっているが、酸素不足は諸々の肉体的衰弱をもたらし行動力・思考力も低下させ精神的に判断力にも悪影響をあたえる。東欧隊にはアタック時にテント・寝袋・燃料まで持参しない傾向がでているが、燃料不足は水分補給を不可能にし、ひいては血液濃度を濃くし、心臓の負担を大きくする。血液の循環不足が肉体的衰弱を早める。アタック食の質量とも工夫の余地あり。混成チームが多く苦境下で共通言語がないためコミュニケーション不足となり、精神的疲労を進め悪感情につながり、互いに話しにくい状態を

つくりだし、遭難救助にも適格な状態把握が疎外されたことも否めない。遭難した中の六人はカラコルムは何度目かの経験があり、これをカラコルム・ヒマラヤ登山歴の有終の美を飾る最後の山行と考え、失敗は許されないと共通した発言をしていること、その言葉から野望過大があったのではないかと指摘している。

付録

登頂者リスト、遭難者リスト、登頂後悪条件の中BCに帰還直後のW. Bauerとのインタビュー、女性初登頂W. Rutkiewiczの登頂記他あり。

登頂成功と遭難が相次ぎ、遭難者には失礼なことだが読者を読み急がせる。カラコルムの夏も長期にわたるひどいストームがある事実、それと装備内容、隊員構成と言葉の問題、悪環境下での精神的安定保持のための注意、他隊との協力方法やその時のリーダー



シップ問題などジャイアンツ登山には参考になること多く一読をお奨めする。

一九八七年刊、HODDER & STOUGHTON (47 BEDFORD SQUARE, LONDON) 出版。定価十二・九五英ポンド (南井英弘)

近江の山

木村 至宏編

全く粗忽な話だが、本稿のご依頼があった時、同名の他書(草川啓三著・近江の山・京都山の会出版局刊)ととりちがえて脱稿したところで、依頼文をよく見ると、なんと小生の早とちりではないか。したがって以後は、木村版、草川版と呼んで両書を併せて紹介したい。

木村版「近江の山」は昭和六十二年二月三日から百二十六回にわたって朝日新聞滋賀版に連載されたものを再録している。著者は前記の木村氏(大津市史編纂室長)他、石丸氏(滋賀県立近代美術館学芸課長)、安土氏(滋賀県立短大助教授)、松浦氏(大津市教育委員会文化財係長)、高梨氏(県立美術館学芸員)といった余り山とは関係のなさそうな方々ではある。したがって草川氏のように登山の対象としての近江の山の紹介ではなく、勢い古くからの

山と人とのかわりあいの跡を辿るということになっていくのは当然としなければならぬ。特に近江は京都と隣合わせの土地柄で、古くから山岳信仰が発達しており、本書の力点もそこに注がれている。

考えてみればそれも当然かもしれない。近江とは名のとおり淡海であり、琵琶湖なしではこの国を語ることはできない。湖を隔てて霞む山々を望みする時、古代人ならずとも時にはわれわれでもハッとさせられることがある。まして昔は今日とちがって信仰がもつと身近なものであったはずで、こうした自然美に神性を感じるのも当然といえよう。

本書は先にも紹介したように斯界の専門家によって書かれたものである。したがって論考は精緻で正確ではあるが、あえて妄言を重ねることをお許しただけならば、信仰の対象としての山だけではなく、(一)木地師、鉾山師などの活躍の後を辿って欲しかったこと。(二)里から離れていても、それなりに人との関わりあいのあった山があるはずである。これらもぜひ取り上げて欲しかったことなどから続編を期待したいものである。

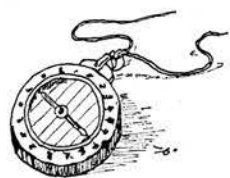
なおこんなことはどうでもよいことだが、木村氏の序文に「中部地方に見られる数千メートル級の高く険しい」

剣沢から

十字峡附近への

初下降の記録

江上 康



「山岳」第七十三年、「岳人」本年二月号などを拝見して、だいぶん古い話、かつ他人の記録ですので気おくれがしますが、一文したためます。

一九五五年夏、七月三十一日真砂沢を出発し八月二日十字峡付近に降りた^{くさざな}沓沢正という先輩を知っております。九州の山好きの方々には知っている人も多い。明善高校で私の二年先輩で、阿蘇高岳北面の岩場などで新ルートを開拓されたりしておられます。西南学院大学山岳部（もしかしたら同好会？）の合宿中のことで、合宿メンバーが五、六人おられたようで、剣沢への同行者が一人ないし二人おられました。（後記するように、黒部で後日会いましたが、一人だったのか二人だったのか思い出せません。当時の「山日記」にも人数は記入しておりません。）

私は同志社大学山岳部の合宿中で、偶然、真砂沢のベースで会ったわけです。ある夜、「この付近で手つかずのところはないか？」という沓沢さんの質問に「剣の大滝という幻の滝がこの沢の下流にあるらしいのですが、まだ十字峡まで通してたどった人はいません」とかなんとかしゃべったわけです。

ところが、この先輩の猪突猛進振りは承知済みでした

が、まさか剣沢の真ただ中へ突入してしまわれるとは思ってもいませんでした。八月二日、阿曽原から黒部入りした私達のパーティ（リーダーは平林克敏先輩）が、東谷の吊橋を渡ったところで、さんさんの格好、服はやぶれ、疲れきった、この沓沢パーティに突然出合ったわけです。実はこの時、初めて彼等が剣沢下降をしたことを知ったわけです。「何か食うものはないか」というので、あの狭い道の上で、隊伍を乱さないように気を使いながら、キスリングの中から何か食物を出したことを覚えております。

その後、沓沢さんに会うたびに、あの時の記録を書かれるように言うのですが、なにしろ物書きがあまり好きでなほうではない方ですので、そのままになっているようです。

沖繩におられるとかいう最近の風の便りで、最近、音信もお互いにとれず、剣沢に関するいろいろな記録を読みますたびに、一緒に下降された西南学院大学の方々と連絡でもとれて、この時の記録がより明らかになることを祈っております。傍証の一助にでもなればと、私の山日記から関係分をひろい出します。

「七月二十八日、真砂で沓沢先輩と会う。久留米大学も来ている。沓沢氏とこんなところで会えるとは。」

七月三十日、昨夜沓沢先輩はチンネアタックのため三ノ窓岩屋にビバークとのこと。先輩の安全を祈る。

八月一日、昨日沓沢先輩は真砂を出たそうだが、どっちに帰ったのだろう。

八月二日、剣沢より十字峡に降りたという沓沢先輩と東谷の吊橋を渡ったところで会う。固い握手をして別れる。」

とあるのは「三千メートル級」が正しいことはいまでもないことである。

一九八八年四月 京都書院刊

三〇二ページ 定価一六〇〇円

（高木泰夫）

頂上の旗

生と死のあるところ

原 真著

内容は、一九七〇、七四、八〇、八五年代に、既に山岳会報に載せたものの、雑誌（週刊誌、岳人、岩と雪、山と溪谷等）、新聞（中日、朝日）等に発表されたエッセイおよび書評の類を、Ⅰ部・登山と人間、Ⅱ部・山の本を読む、の二部構成に一冊の本にまとめたものである。ひととおり読んでみて、いちばん印象に残ったところは、最初に記された「なぜ山に登るか」の最後に、「なぜ山に登るのか、答えは簡単だ。山には死があり、したがって生があるからだ。下界には多くの場合、それがない」という記載がある。著者の十五年前の文章である。「書く動機が何であつたにせよ、書くことで山について考える時間が、その時々を持てたからである。それぞれの文章を書いた時の私は、その時期に固有の私であつて、今からでは決して再現することのできない過去の自分である」と

いうことが著者のあとがきに記されている。紹介した文章が、その後著者の心の中でどの様に変化したかは知る術を持たないが、初めて接した小生にとっては強烈なものであった。

著者は医師であり、山を登る人であるが、そういうこととこの本の本質とは関係がない。書かれた内容に対し読む側の印象は様々であろうが、ずばり個性が全面に出ている文章がたいへん興味あるところである。

一九八八年五月二十五日、筑摩書房刊、二四六頁、定価一、四〇〇円

(浜口欣一)

御嶽の信仰と

登山の歴史

生駒 勘七著

本書は昭和六十二年五月に亡くなった木曾御嶽の歴史民俗研究の第一人者、生駒勘七氏の遺稿集で、昭和二十七年、御嶽、駒ヶ嶽総合調査会から御嶽の研究を依頼されて以来の成果が集積されている。すでに昭和四十一年、『御嶽の歴史』(木曾御嶽本教刊)が上梓されているが、この本はその集大成といつてよい力作である。『御嶽の見える村』(実業之日本社刊)の著者澤頭修自氏がこの本に寄せたあとがきによると、生駒氏は死の前年の夏にも

家族の反対を押し切って「最後の調査」に登山したというから、御嶽研究にかける情熱は並み大抵のものではなかったことがうかがわれる。

『木曾節』で人口に膾炙されてきた御嶽さんは、今も年間三十万人が登拝する山岳信仰の山で、富士山とともに大衆登山のさきがけの役目を果たしてきた庶民信仰のメッカである。国峯(くにみたけ)の一つとしての修験道道場時代にはじまって、精進潔斎を経た山道者(やまどうじゃ)の集団登山から、江戸中期、覚明、普寛の二人の行者による軽精進の大衆登山の時代、さらに明治維新の変革期をくぐりぬけて教派神道に吸収されてゆく歴史過程が刻明に記述されていて興味ぶかいが、地元の研究家らしく文献はもとより石像銅像、霊神碑に至るまで、豊富な資料を集めているので強い説得力をもっている。

この中で私が特に興味をそそられるのは、軽精進による御嶽登山の大衆化をはかった覚明と普寛の業績である。二人が一部のプロ集団のための山を大衆に解放した功績はきわめて大きい。尾張の覚明は一般信者の御嶽登拝を当局に願ひ出て却下されるが、多くの迫害をはねのけて黒沢口登山道の改修にあたり、ついに七十五日精進潔斎を行わず水潔斎のみで関係筋に許可を得

ることなく登山を決行する。その後を承けて江戸から普寛(秩父大滝村の出身)が王滝村にやってきて、これも幾多の障害を乗り越え王滝口を開くのだが、前後の様子が多くの史料を通して手にとるように読みとれる。普寛は御嶽を富士に次ぐ高山としてあがめ、火難、病魔除けの祈願をしているが、明治維新後御嶽に登った外国人も同様御嶽を日本で二番目の高山としているのが面白い。外人といえは第四章御嶽登山史の中に、外国人の登山のはじまり、という項がある。外人による登山の最初は富士山だが、次は御嶽で登頂とエドワード・ディロンの二英人であ

ったといい、アーネスト・サトウやウエストンら数名の名をあげ紀行文の一部を紹介しているが、自然、民俗に対する鋭い観察力がうかがえる。

日本文化の研究を手がけようとする外人の中に、山岳宗教をテーマに選ぶ人が多いというが、御嶽を中心とする民間信仰の研究はいろいろな意味で日本人の精神構造に迫りやすい、と専門家はいう。近代登山史の面からみても、その母胎の一部となった講の具体的な姿を知る上で本書は格好の入門書となるにちがいない。

一九八八年四月十八日、第一法規出版刊、二七七頁、一、六〇〇円

(伊佐九三四郎)

天帝の峰に挑む

東チベット

— 四川学術調査三〇〇〇キロ
神戸大学西蔵学術登山隊編

国際交流に伝統のある神戸大学山岳部が素晴らしい学術登山隊を送り出し、このほど立派な報告書が出版された。

チベットとブータンの国境付近にあるクーラ・カンリ七五四峰は、長い間幻の山と呼ばれ厚いベールに覆われていた。一九五八年の中尾佐助氏と六三年のガンサー氏により始めてその山容が写されたほどであり、周辺の資料



八重松

も殆んど無いまま世界第二位の未踏峯を誇っていた。

周囲の情勢からその解放は最後の最後になると思われていたが、何年も粘り強く入山交渉を続けた平井一正隊長に先ず敬意を表したい。志を立てて八年、テレビ、ラジオで中国語の独習を始めて十年余、まさに平井さんの執念の結晶である。

その熱意が神戸大学の全学内を動かし、動植物、地質、地理、人類学等の学者を動員した大変スケールの大きい学術登山隊を成立させた。

登山部門では武漢地質学院山岳部の青年五名の参加を得、チーム・ワークもよく見事この難峯の頂きを二度にわたって極めた。

この登山の記述は三分の一ほどを占め、残りに中国科学院との合同で実施された学術調査の成果が、素人の私にも解るよう平明に解説されている。

一億三千万年前ゴンドワナ大陸から分裂し北上を続けてきたインド亜大陸は、五千万年前ユーラシア大陸に衝突した。テーチス海を埋め、更に隆起して産まれたチベット高原は、壮大な地球の歴史を目のあたりに感じさせる秘境で、その報告は思わず読む者を魅了させてくれる。

カラー写真四八頁の他、白黒写真や手書きの地図や資料も多く、その内容

の豊富さは近頃出色の報告書といえよう。

巻頭言で新野神戸大学長が『この西藏学術登山隊の真の意味の成功は、むしろ今後の交流の成果如何にかかって』と述べられているが、その第一歩として昨秋中国地質大学(武漢)登山協会との間に友好協定が結ばれた。そして第一回目の登山交流として四



還暦を迎えた雲取山荘

久し振りの好天に恵まれた十月十五日夜、東京都の最高峰、雲取山直下にある雲取山荘で還暦の祝典があった。

と言っても雲取山荘が、武州雲取小屋時代から数えて創業六十年にあたるため、それを記念して行なわれたもの。

山荘は昭和三年七月に秩父鉄道によって建設され、武州雲取小屋として出発した。当初は無人小屋であったが、昭和五年頃、鎌仙人の愛称で親しまれた、富田治三郎氏が初代管理人として

川省の雀儿山(チェルー山・六一六八m)への合同学術登山隊が本年既に出発した。二回目は来年日本での実施が予定されている。

今後の発展を願うものである。

一九八八年八月十日、神戸新聞総合出版センター刊、二八三頁、定価三五〇〇円。

(宮下秀樹)

登山者の世話に当たっていた。山荘は昭和十九年と三十三年に増改築を重ねて、現在の収容人員三百名の立派な山小屋になり、昭和三十一年には雲取山荘と名称が改められた。富田氏の死後は、本会々員の新井信太郎氏が二代目の管理人となつて、現在に至っているが、新井氏の代になってからでも二十八年が経過した。小屋建設の詳しいいきさつについては会報『山』四八五(六号)の柿原謙一氏による「武州雲取小屋のできた頃④⑤」を参考にされた。

小屋内各所に名物のランプがともらし、午後六時。思い思いのコースを辿って参集した約三百名の出席者が、満天の星空のもと、遠く眼下に東京の灯を望みながら、山荘前の広場に集結。まず管理人の新井氏、次いで本会、望月達夫名誉会員の挨拶に続いて、三峰山にある三峰神社宮司さんの祝詞、秩

父鉄道関係者、岳人、地元代表などなどによる玉串奉納のあと、この日のために担ぎ上げたという二斗樽のこも被り二本の鏡開きで雰囲気は一気に盛り上った。

ぐっと冷え込んだ夜気の中での一杯は、キューと腹わたにしみる。還暦を祝って何度も乾杯の音が上がる。古くからのファンも若人も御神酒片手に思い出に話はずむ。景気よく立ち昇る焼肉の煙、赤々と燃えるキャンプファイヤーの火に、雲取の動物たちは今宵ばかりは目を白黒させていたことだろう。この日の庄巻は、花束のプレゼント。トレッドマークの手ぬぐいを頭に巻いた新井氏は、女性のファンから次に贈られる花束に埋もれて、照れながらも至極満悦の体であった。

翌日の下山の足が心配されるほど、夜遅くまで談笑の輪は広がり、その中には、当会々員の姿もあちらこちらに見られた。

(泉 久恵)

秘峰、霞沢岳

坂倉登喜子

徳本峠の早曉は満天の星空、半月の光が輝いて、小屋の周辺は月あかりで歩けるくらい明るかった。

四時、眼覚しがなり炊飯のための薪の音で起床、四時半朝食、五時出発。

峠から霞沢分岐へ下る頃は、月明りも薄れて、ライトを照らして歩いた。

前日、上高地から峠へ登る途中の霞沢岳入口に着いた時、分岐から並行した道の奥に、何やら茶色の獣をGさんが発見した。私も首の白い毛を見定めて「カモシカだ」と確認した。

じつとこちらを見て前進してきた。皆、カメラグループのメンバーなので、フラッシュをたいてシャッターを切る者、探鳥用の双眼鏡で見るMさんなど、一瞬、皆大きなカモシカに注目した。

私も双眼鏡を向けたがかなり大きな顔がぐっと迫ってきてびっくりした。たしかに一米以上ある大きな体をした

かと見たが、十分くらいして右側の藪に入ってしまった。そのカモシカのいた道から暫く登ると左側に草の斜面が展けて、日の出を待つのに絶好の場所、ここで早くもカメラタイム。待っているとなかなか陽が出ないので、何枚も朝焼け空を撮る。最後にやっと日の出の一枚を写して出発、こんな撮り歩きでは先が思いやられたが、カメラ部員のために晴れたのか十月二日は快晴で、穂高の岩峰がぐーんと迫るようだ。ジャンクションピークの展望も良いが、次のK1の展望も最高、ここから見る霞沢岳への稜線は、岩屋根が遥かに続き前途の長さを感じた。紅葉し

始めた山肌は黄ばんだカラマツ林、ナカマドは雨と日照不足で葉が縮れて見ることがない姿、今年の紅葉はどこもあまり良くないらしい。岩や木の根の稜線歩きは上り下りがひどく、足や手の届かない所もあり、精一杯四つんばいでふんばったり、岩にぶら下ったりしてK2に到着。

常に穂高の岩峰を仰ぎながらのコースなので、良い位置からシャッターチャンスを見つけて撮る。それでも足の強いメンバー揃いで、K2から先はゴゼンタチバナの実を見たりしての稜線歩きで、後半はピッチが上りなんとか午前中十一時頃霞沢岳山頂に到着した。

その日登ったのは私達女性九名と単独行の女性一人と男女二名だけ、他の人達はK1で断念した下山組だった。

私達は二等三角点を囲んで感激しながら昼食をとる。徳本小屋の小松さんが五年前に切り開いたこのコースは、篤志家向のバリエーション・ルートで、最近、山仲間注目されているコースとか。

山頂からの帰途はやはり上下が厳しいので滑らないよう慎重に歩いたが、心なしか紅葉も帰りの方が色増したかに見えて、振り返りながら霞沢岳の山容を幾度かカメラに納めて歩いた。その後はカメラをザックに納めてひ

◎日本山岳会

高郷山荘へどうぞ

●高郷村営スキー場が昨年完成（山荘より自動車で五分）。

●正月は囲炉裏を囲み、二月上旬は雪下ろしやカマクラをつくってその中で過ごすなどの楽しみがある。

場所 福島県耶麻郡高郷村峯利田

☎0241-441306

料金 一泊二〇〇円（素泊り）

電気、ガス、ストーブ、風呂完備。炭もあり

申込 耶麻郡高郷村荻野

伊藤 尊 仁

☎0241-442124

明神の山のひだやに一泊した翌日、上高地から霞沢岳を仰いで、来年のウ祭で、登った感激にまた浸れそうだと

尾瀬晩夏

小林 碧郎

星鴉裂けし風禍の樹々匂ふ
水芭蕉実となり木道縋へる
夕焼けて池塘に影のみつがしわ
岩つばめ舞う夕映えに燧岳
さぎすげに螢ともりて月遅し
暮鳴くや夜空に踞む至佛岳
朝焼けのいる鶴草にうつりけり
葉に托す河骨の花朝おもしろ
温原をわかつ瀬のあり岩魚すむ
水漬きたる木道にひらく未草

鳥海山・十月

大橋 克也

汗ぬぐい 辿りし岩路 見下して
勵まし連れ来し 手をば握りぬ
さりげなく 疲れし吾れを頂に
初めに踏ませし 年下の友
息はずむ 岩路を攀ちて 海を見つ
助けし友と 並び立てずに

追悼

高橋定昌さんを悼む

澤村 幸蔵

昭和六十三年十月十日午後七時十分、高橋さんが東京都台東区の永寿病院で腎不全のため亡くなられた。入院されたことが知られていないので、新聞などで知った方は驚かれたと思う。七月二十一日に永寿病院へ入院した時は、アレルギー性胃炎ということであって、八月十二日に開腹手術を受けられた。術後の経過も良く本人もお元気だ、ということを知りて見舞いに行かねばと思っていたところ、病状が好転しないという話で見舞いを遠慮していたが、ご家族からは知人が見えたと本人が疲れるとのこと、全快を祈っていた矢先に亡くなられた電話を聞くことになってしまった。

高橋定昌(さだまさ)さんは、岳界では「ていしょうさん」で通用していたし、本人も認めておられたようである。下町生れの江戸っ子で、若い時からスポーツ好きの方であった。町内の若者を集めて先頭に立って野球をしていたと、つや夫人が話しておられた。高橋さんの登山も、その延長線上に行なわれたもので、昭和十年山岳巡礼倶楽部を結成し代表に推され活躍された。特に、社会人山岳会の横の連携に意を注がれ、昭和十六年には東京府山岳連合会の理事として情熱を傾けられたのは、後年全日本山岳連盟結成の中心になられる萌芽であろう。

昭和七年四月多摩美術学校図案科を卒業、デザイナーを職業にされておられたので、山仲間から頼まれては無

償で図案を書いておられた。デザイナー会社社長として活躍し、ポスターデザインで一等賞を何回も受賞されておられるが、つや夫人の話では山関係の用事が本職ではないかと思うほど家を明けることが多かったと述懐されておられた。戦前は、丹沢・女郎小屋沢最奥の大棚(薬研棚)登攀、朝鮮金剛山の全山縦走等を行ない、戦後は冬期上越国境初縦走隊リーダー、ヒンズークシユのアッパゾム登頂、カラコルム・トリニティピーク隊長として初登頂に成功する等の実績を持っておられる。このように、登山者として活躍する一方、全日本山岳連盟理事長、東京都山岳連盟会長、日本山岳協会副会長、地元台東区の社会教育委員、台東区体育協会副理事長、台東区山岳連盟会長、日本山岳写真協会副会長等々を歴任されてきたバイタリティは、明治人の気骨を垣間見る想いである。

高橋さんは意志の強い人であり、人心を掌握する術に長けた人でもあるが、普段接した印象では決して過激な言動を示す人ではなかった。生来の気性が、多くの人々の信頼を得て数々の要職を引き受けることになったのである。明治四十四年に東京下谷で生まれ今年十月三日が満七十七歳の喜寿を病床で迎え誕生日の一週間後に逝った。十月十五日に国体特別功労者として日本体育協会長から感謝状が贈られた。喜んでいただくには、あと二週間生きていてほしかったとの想いがしきりである。浄雲院喜岳定昌居士の戒名の定昌は「じようしょう」と読む。

昭和二十八年十月、日本山岳会入会。会員番号四一一二。

始めてに山に 登りし人の云う
この不思議なる 拡がりは何か

秋の嶺を 緋色の風が吹き渡る
ごとくに見せて ななかまどの尾根

鳥海の千疊ヶ原の笹群の
笹鳴りの中に 吾が身小さき

会務報告

十月理事会

十月十二日、午後六時三〇分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚、村木両副会長、
長、鳴原、新井、早坂、太田、大橋、
鈴木、橋本、岡沢、大森、関塚、松
永、勝山各理事。山野井、平林各評議員。
太田監事

委任 田部井、織田沢、西村、小林、
浜口各理事。松田、小倉各評議員

審議事項 なし

報告事項

総務 年次晩餐会及び記念山行について。
名簿発行準備について。

山岳 最終編集にはいる。前年度より
増頁となる。

図書 「マウンテンワールド」寄贈受
け入れ、図書交換会日程について。

資料 ヒマラヤ展示物受け入れ。資
料貸し出し簿を事務局へ常備すること

図書受入報告

図書委員会

昭和 63 年 8 月分受入図書

1. シャイレンドラ・サーカル他編 三枝礼子他訳「二十世紀・ある小路にて」段々社 1988 (版元寄贈)
2. 岡田敏夫著「足尾山塊の山」白山書房 昭和 63 (著者寄贈)
3. 岡田敏夫著「足尾山塊の沢」白山書房 昭和 63 (著者寄贈)
4. 田中弘士著「私の山行日記」田中弘士 昭和 63 (著者寄贈)
5. 田中邦太郎編「蔵王地藏尊Ⅰ集」蔵王地藏保存会 1988 (後藤幹次氏寄贈)
6. 三島昭夫著「縄文杉は訴える」新潮社 1988 (著者寄贈)
7. 市根井孝悦著「大雪山」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
8. 神戸大学西蔵学術登山隊編「天帝の峰に挑む」神戸新聞総合

出版センター 昭和 63 (編者寄贈)

9. 須藤儀門著「鳥海考」光印刷 昭和 63 (林稔氏寄贈)
10. 高澤光雄編「ヌプリ 20 周年記念誌」日本山岳会北海道支部 1988 (版元寄贈)
11. 豊田秀夫編「日本の高山植物」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
12. マリアンヌ・マングドゥング著 酒井懋訳「ママサ」酒井懋 1988 (訳者寄贈)
13. 成瀬富士一著「岐阜県の山」成瀬富士一 1987 (著者寄贈)
14. 永田芳男著「北岳のお花畑」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
15. 久保博司著「双星の輝き」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
16. 木村幸治著「おじさんたちの冒険」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
17. 浅野孝一著「40 代からの山歩き入門」ナツメ社 1988 (版元寄贈)

にした。

フィルム 川合周氏の講演会開催につ

いて。

婦懇 十月の鳥海山登山は中止に。シ

ヴァ報告会について。

自然保護 「霜のきた尾瀬で自然を語

る」集会の予定について。

医療 来年三月十日筑波大浅野先生講

演会について。

科学 秩父宮学術記念賞推薦につい

て。「三国合同登山隊の気象観測につ

いて」の開催予定

学生 「韓国登山隊報告会」、「第二十

五回マラソン大会」開催予定につい

て。

山研 九月の利用状況。閉所予定につ

いて。

青懇 第五回日韓交流登山の実施につ

いて。

●「未来ビジョン」の報告が村木副会

長よりあった。

●今年度永年会員表彰予定者につい

て。

評議員会

日時 十月二十七日十八時三〇分

場所 本会議室

出席者 今西会長、大塚、村木両副会

長、松田、小倉、山野井、平林、中世

古、田中、安間、佐々木、広羽、大

島、川上、杉野目、沢村の各評議員。

橋本、新井、勝山の各理事(委任出席
中島他五名)

議事

(1) 外国人名誉会員推薦の件

かねてより懸案の本会に対し功労の

あった外国山岳会員を本会の名誉会

員に推薦する件については、本年が三

国友好登山成功の年でもあり、是非推

薦すべきではないかとの提示があり、種

々検討の結果、定款、推薦内規共に問

題ないので、次の五氏を本会の名誉会

員として推薦することに決める。

史占春(中国)、クマール・カドカ

殿下(ネパール)、H・C・サリ

ン(インド)、S・ブラヴァント(スイ

ス)、フォスコ・マライニ(イタリ

ーJAC会員)

(2) 会員からの名誉会員の推薦の件、

本年度は次の四氏を推薦することに

決定。

広瀬 潔(会員番号九三三番)

初見 一雄(会員番号一三九六番)

関根吉郎(会員番号一四六九番)

辰沼広吉(会員番号一九五三番)

(3) 本年度永年会員になれる方は次の

三氏である。

望月達夫(会員番号一七三九番)

今村正二(会員番号一七五八番)

高橋宏一(会員番号一七六三番)

(4) 感謝状贈呈の件

多年に亘る山日記刊行の功労に対し

茗溪堂坂本矩祥氏に感謝状を贈呈して

はどうかとの提案があり、万場一致賛

成した。

なお今後は、表彰に関する問題は、

評議員会に諮って決めることも併せて

了承した。

(松田)



(10月)

3日 総務委員会

4日 自然保護委員会

6日 婦人懇談会

11日 常任評議員会・婦人懇談会

12日 理事会

13日 図書委員会

14日 海外委員会

17日 会計監査

18日 シヴァ登山隊報告会

19日 山研委員会・三水会

10日 フィルム委・三国H.Q.会議

21日 科学委員会

22日 図書交換会

24日 自然保護委員会

25日 「映像の変遷について」講演会

26日 学生部韓国登山報告会

27日 評議員会

28日 資料委員会

10月来室者45名

10月

物故

高橋定昌(四一・二) 10・10
吉野良介(九九・九八) 10・4



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

◎日だまり山行

静かな山頂、古い峠、のどかな山村、飯能の裏山を歩きます。開発の波が押し寄せています。今歩いておかないと、失くなってしまいそうな道です。

期日 二月十九日(日)

コース 西武池袋―武蔵横手―カマド山―久須美坂―小岩井―榎坂

峠―荏生―赤根峠―朝日山―大河原(解散)―飯能―池袋
(歩程4時間半〜5時間)

集合

西武池袋7時54分発西武秩父行き車内3両目。又は、武蔵横手駅8時50分。八高線利用者には東飯能8時40分発です。

費用

約千円(交通費)

申込み

2万5千分の1「飯能」不要。問い合わせは往復ハガ

キで。

自然保護委員会主催

訂正 前号会報7ページ3段目と4段目の「der Hof」「Winterreisn」は夫々「den Hof」「Winterreise」になります。また同会報18ページにある新入会員紹介者欄に「小倉薫子」とあるのは小倉薫子氏の誤りですので、ご訂正をお願いいたします。(編集)

あとがき ▼今年もまもなく終ります。毎月、編集、校正と続くため、JACの仕事が始まり、そして暮れるような気が、毎年します。

▼会報の編集をしていた時間は、自分の一生で失った時間だった、という元会報編集者の手紙を見せられたことがあります。

▼心しなければいけない。

(0)

昭和六十六年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビニウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今西寿雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(281)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―三一六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社技報堂